

山里永吉

——芸術家、劇作家、歴史家、文化系役人

サイフマン・トラビス（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）

seifman@fc.ritsumei.ac.jp

要旨

山里永吉（1902-1989）は沖縄出身の芸術家、劇作家、小説家、歴史家、文化系役人でもあり、特に 20 世紀半ばから戦後数十年間、沖縄／琉球のアイデンティティの重要性と伝統芸術・文化の復興や継続を提唱する上で重要な役割を果たした。この研究紹介では、今研究しておる 1960 年代後半から 1970 年代前半にかけての沖縄の日本統治への「復帰」に反対する政治運動における彼の位置づけを検討するプロジェクトとの関連に、山里の伝記の全体像を紹介する。

Abstract

Yamazato Eikichi (1902-1989) was an Okinawan artist, playwright, novelist, historian, and cultural affairs official who played a notable role in advocating for the importance of Okinawan / Ryukyuan identity, and the revival and continuation of traditional arts and culture, particularly in the postwar decades of the mid-to-late 20th century. In this essay, I present a general overview of his biography, in connection with a more focused research project examining his place in the political movement opposing “Reversion” of Okinawa to Japanese governance in the late 1960s to early 1970s.

1. はじめに

2022 年、琉球王国の王宮であった首里城の復元を調査していた私は、沖縄芝居の山里永吉（1902-1989）作の『首里城明け渡し』を観劇した。1930 年に初演されたこの戯曲は、琉球国王の尚泰（しょう・たい）王が王宮を明治政府の琉球処分官に明け渡し、琉球王国が終わりを告げ、琉球諸島が沖縄県として日本に編入されるきっかけとなった出来事を扱う史劇である。その数ヶ月後、1969 年に出版された『日本は祖国に非ず』という大胆なタイトルの、まさにその山里永吉が執筆した小冊子を知った。

この 2 つの魅力的な作品の作者についてもっと知りたいと思って、調べてみたら、その生涯がほぼ 20 世紀全体にまたがっていた芸術家、劇作家、小説家、芸術文化エッセイスト、歴史家、文化系役人など、さまざまな顔を持っていた人物だったと発見した。山里は、沖縄芝居の発展や、沖縄・琉球のアイデンティティと文化の振興に重要な役割を果たした。沖縄戦で破壊された数々の著名な文化・史跡の戦後復興や復元も監督した。また、1960 年代後半から 1970 年代前半にかけて、琉球列島のアメリカ占領期が最終的に日本国家に復

帰することで終わることに反対する政治運動にも積極的な役割を果たした。

山里は生涯を通じて、琉球旧王家の尚順、いわゆる沖縄学の父の伊波普猷¹⁾、詩人の山之口獺、前衛アーティストのマヴォ、画家の山田真山、役者の伊良波尹吉や真境名由康、出版家の菊池寛、小説家の川端康成、民俗学者の柳宗悦など、多くの著名人と接触があったにもかかわらず、山里の活動や作品について論じる研究は、日本語でも英語でも極めて少ない。この簡単な伝記の概要は、これを是正するための最初の一步として執筆するものである。

2. 生い立ちと芸術家としての山里

山里の人生については、1980 年代に出版された自伝『私の戦後史』のおかげで、多くの詳細を容易に知ることができる。²⁾ 彼は 1902 年、裕福で人脈のある那覇の家庭に生まれた。父親は銀行に勤めるかたわら、賃貸住宅をいくつも所有していた。永吉は幼い頃から芸術や文学に親しみ、夏目漱石や森鴎外などの作品を父の蔵書から読み漁り、父の親友であった伊波普猷（いふあ・ふゆう; 1876-1947）が館長を務めていた沖縄県立図書館で多くの時間を過ごした。

山里はまた、若い頃から絵画の勉強に励み、17歳までにグループ展に作品を出展、1920年には、渡嘉敷唯選(とかしき・いせん)、野津久保(のづ・ひさやす)、浦崎永錫(うらさき・えいしゃく)らと一緒に「ふたば会」を設立した。³⁾ 山里の自伝によると、その時期、『白樺』という雑誌に紹介された岸田劉生やフランス印象派の画家たちなどからインスピレーションを受けた。⁴⁾ その3年間後の1923年に絵画を勉強しに東京へ行った。当初は洋画家の岡田三郎助に師事していたが、やがて日本美術学校に入学した。⁵⁾ 山里によると、このような名門校に入学できたのは、その年にあった関東大震災の後、多くの留学生が去っていったからだと言っている。⁶⁾

その頃、田河水泡(たがわ・すいほう)や村山知義(むらやま・ともよし)らと出会い、彼らが結成した前衛芸術運動グループの「マヴォ」(Mavo)に参加した。山里が作った《立ってゐる男》というオブジェは『マヴォ』の雑誌の創刊号の表紙に掲載される。⁷⁾ 1925年から27年にかけて、マヴォのメンバーと並びに展示に出展したり、東京で開催された三科の展覧会などにも参加した。⁸⁾

1924年夏、山里は沖縄に戻り、波上軒というレストランを含むいくつかのところで初の個展を開催した。⁹⁾ 日本美術学校には戻らなかったが、戦後、同校は山里を卒業生として遡及的に認めた。¹⁰⁾

山里のマヴォの影響を受けた作品は、その前衛的な形式だけでなく、政治的な引用もあってか、沖縄では疑惑の目を向けられることもあった。例えば、山里が1924年に発表した作品のひとつには《レーニンの死》と題されたものがあり、これはレーニンが亡くなった同年であった。¹¹⁾ 山里は「革命」とは芸術の中の革命に過ぎないと主張したにもかかわらず、展覧会の監視を命じられた警察官は、その作品を展示から外すよう強制した。¹²⁾ 同年、東京のマヴォの中心メンバーが同様の監視を受け、休刊に追い込まれたとき、警察は那覇の実家にも山里を探しに来たが、山里は当時、東京にいた。家族の人脈のおかげで、沖縄の著名な画家である山田真山の東京の自宅に約1年間滞在することができた。しかし、その年のうちに父は他界した。

3. 小説家・劇作家としての山里

その後、山里は沖縄に戻った。銀行を辞めた父親が開いた漆器店を一時的に継いだが、やがて芸術や執筆に専念するため、経営を他の人に譲った。¹³⁾

1930年、伊良波尹吉(いはら・いんきち)、真境名由康(まきぎな・ゆうこう)、島袋光裕(しまぶくろ・こうゆう)という沖縄芝居の役者から新作の執筆を依頼された。日本の能楽や歌舞伎、または中国の京劇の影響を受けていた琉球王国時代に創始された歌舞劇の組踊(くみうどうい)に対して、沖縄芝居は近代的な演劇ジャンルであり、沖縄の物語を様式化せず、比較的に現実的

で、西洋の影響を受けた劇様式で表現していた。戯曲は、口立てと呼ばれる方法で制作された。口立てとは、完全な脚本がなくて、おおよその筋だけ立てて置き、役者同士が話し合っただけで芝居をまとめていくもので、伊良波らは、沖縄芝居のあり方に挑戦し、その枠を広げることに関心を寄せていた。これは、山里に完全な芝居の台本を書くよう依頼し、劇作家としてより大きな創作権限を渡すことから始まった。¹⁴⁾

山里はまず、薩摩藩と琉球王朝によって禁止された一向宗の信仰を説き広める人物を描いた『一向宗法難記』という戯曲を書いた。

同年末、山里は『首里城明け渡し』を書いた。日本語の台本を沖縄語(うちなーぐち)に翻訳する際には、伊良波らが協力した。山里は、劇場の楽屋で太鼓の音に包まれながら、その場の環境に浸って戯曲のほとんどを書いた。¹⁵⁾ 琉球王宮が1879年に日本政府の代表者に明け渡した事件の劇化するため、当時の王宮の役人であった喜舎場朝賢(きしゃば・ちようけん; 1840-1916)が書いた『琉球見聞録』に頼った。¹⁶⁾

那覇の大正劇場で初演されたこの芝居は、遠方からも観に来る人がいるほどの大ヒットを記録したという。¹⁷⁾ 新城栄徳は、この芝居が沖縄芝居というジャンルに「新風を吹き込む」と書いていた。¹⁸⁾ 仲程昌徳は、この芝居の大きな人気と影響は、伊良波、真境名、などの他の出演者の人気によるものだけでなく、描かれた出来事の感情的な力と重要性によるものだと指摘した。¹⁹⁾ 1930年といえば、明治政府が一方向的に琉球王国の廃藩置県を宣言し、王宮を占拠してからただ50年あまりが経った頃であった。観客の多くはその時代を生きてきたか、そうでなくても両親や祖父母から聞いたことがあるかもしれない。植民地主義による同化、貧困、帝国主義的・軍国主義的国家への編入など、過去50年間に経験したすべてのことを思いながら、王国の独立の最後の瞬間を描いたこの劇的な場面を見て、多くの人々が複雑で力強い感情を抱いたであろうことは想像に難くない。

その頃、山里はそれに加えて、『宜湾朝保の死』、『ペリー日記』、『那覇四町昔気質』という同じ19世紀中期や後期の琉球を舞台にした他の戯曲も書いていた。²⁰⁾ 『那覇四町昔気質』は、「命どう宝」(ぬちどうたから)という名言と尚泰王との結びつきを沖縄の民衆意識に定着させたとされている。この言葉は、沖縄の人々の回復力や戦争に反対する献身的な姿勢の象徴として、沖縄のアイデンティティや文化の中で強力かつ中心的な位置を占めるようになった。²¹⁾

沖縄や沖縄の人々を戦争という暴力にさらさないため明治政府に無血開城して、そうすることで沖縄の人々の命を守るという決意を国王が実際に詠んだ琉歌に由来することは一般的に知られている。²²⁾ しかしながら、学者によると、実は、起源が『那覇四町昔気質』の登場人物の尚泰王が舞台上で琉歌を詠むこ

とだった。²³⁾

戦後、『首里城明け渡し』の台本にもこの台詞が追加され、王が去る場面の情感がさらに深まり、多くの人々の沖縄人や琉球人としての個人的なアイデンティティの中で、この言葉の位置づけがさらに強固なものとなった。²⁴⁾

山里は同時期に連載小説を発表し始め、最初の作品は琉球新報に1933年から掲載された『熱帯魚』という挿絵入りの連載小説であった。画家の金城安太郎(きんじょう・やすたろう; 1911-1999)が挿絵を提供した。沖縄で発行された新聞で挿絵入りの連載小説が掲載されたことも初めてであった。²⁵⁾ 山里は当時が困難な時期で、新聞社との仕事は奇妙な経験だったと書いた。編集長は新作を何回も投稿するよう誘ったが、他の編集者がその同日の同じ新聞に山里のことを批判した。²⁶⁾ それでも、キャリアの初期段階において、山里が執筆した3つの小説と9つの戯曲からなる『山里永吉集』という作品集が出版されるほど多作を残した。²⁷⁾

同年、山里は『心中した琉球王』と題する短編小説を若い作家のために『文藝春秋』を創刊した東京の菊池寛氏に投稿し、菊池はこれを文藝春秋が発行する雑誌『オール読物』1933年8月号に掲載した。²⁸⁾ これが山里と菊池との関係の始まりになった。1935年に菊池が沖縄を訪れた際、山里に連絡を取り、琉球史に関する本を求めた。数年後、今度は山里が東京を訪れた時には、菊池が山里を小説家の川端康成に紹介した。²⁹⁾

4. 尚順、柳宗悦、そして戦時下

1936年、山里は35歳のときに23歳の豊平勝子と結婚した。豊平は那覇市中心部で洋裁業を営んでおり、沖縄初の洋装婦人服を販売していた店かもしれない。2人は洋装で結婚式を挙げた。ある資料によると、沖縄で初めてのことであったようだ。³⁰⁾

山里は沖縄のエリート社会で人脈を広げ、楽しみ続けた。山里が最も親密で積極的な関係を築いたのは、最後の琉球国王であった尚泰の四男、尚順(しょう・じゅん)男爵であろう。琉球王国が滅亡して以来、王族の王子ではなくなったが、尚順は、邸宅の所在地にちなんで「松山王子」と呼ばれていた。また、琉球新報や大正劇場の創設者でもあった。

山里は1937年に初めて尚順と出会い、すぐに松山御殿に自由に出入りできるほど親しくなった。山里は1944年に戦時下の沖縄から疎開するまでの約7年間、週に何回も王子と夕食を共にし、その後夜遅くまで様々な話題について語り合った。山里は、尚順は百科全書的な知識と豊富な蔵書を持っており、王子から琉球の歴史と文化について、まるで一人の教授と一人の弟子がいる大学のように多くを学んだと書いていた。³¹⁾

尚順はまた、山里が1937年から1940年まで自費で企画した短命の雑誌『月刊琉球』にも多くの文章を寄稿した。その一つには、王子が1879年に王宮を明け

渡した際の個人的な体験について、思い出を綴った。同誌には他にも、沖縄学の名人である東恩納寛惇(ひがおんな・かんじゅん)、伊波普猷、比嘉春潮(ひが・しゅんちよう)、そして民芸運動の主唱者の柳宗悦(やなぎ・そうえつ)、画家の金城安太郎、陶芸家の河井寛次郎(かわい・かんじろう)や浜田庄司(はまだ・しょうじ)などの著名な人も寄稿していた。³³⁾

1938年に柳が初めて沖縄を訪れたとき、山里は彼を案内した。³⁴⁾ 翌年の2度目の訪問の際、柳は「方言」、すなわち沖縄の言葉(うちなーぐち)を話すことをやめさせようとする県の取り組みに疑問を投げかけ、異議を唱えたことで、今では有名ないわゆる「方言論争」を巻き起こした。³⁵⁾ 山里がこの「論争」に積極的な役割を果たしたかどうかは不明だが、柳の意見におおむね同意した。沖縄の人々に自分たちの言語と文化は「野蛮」であると教えた植民地主義的な教育を非難した。琉球の言語を捨てようとの同化主義的な努力を支持する衆望はその教えのせいだと主張して、非難した。³⁶⁾

戦争が沖縄に近づきつつあった1944年8月、山里は妻子とともに京都に移り住んだ。沖縄の紅型織物や衣服を買うために沖縄を訪れた際に知り合った、友禅織物店「ゑりまん」と「木崎洋服店旧木崎呉服店」の店主たちの支援で、彼らは住居を得ることができた。³⁷⁾ その時期の京都は、日本各地の他の人々と同様で、山里とその家族も、食べ物やその他の基本的な生活用品のために苦勞した。山里はできる限りの仕事に就き、自由な時間を京都や奈良の史跡巡りに費やし、さまざまな日本の芸術や文化伝統に親しんだ。³⁸⁾ 山里の娘は京都滞在中に、6歳で亡くなった。³⁹⁾

5. 戦後初期:文化人としての山里

弟の永達(えいたつ)と共に鶴崎(大分県)でしばらく過ごした後、山里は1947年11月に沖縄に戻った。程なくして、戦後新しく設置されて沖縄民政府の博物館課の課長と任じられた。自伝によると、これは戦前の一時期、琉球新報の社長を務めていた又吉興和(またよし・こうわ)副知事との個人的なつながりのおかげだったと述べている。⁴⁰⁾ 1955年に原田貞吉(はらだ・ていきち)館長が死去すると、山里はその職を引き継ぎ、同年改称した琉球政府立博物館の館長になった。⁴¹⁾ 2年後、文化財保護委員会の会長にも就任した。⁴²⁾

この二足のわらじを履いての最初の主な活動として、東京や京都などで所蔵されていた沖縄の重要な文化財の「買い戻し」・「返還を求める」旅に出た。その旅に手に入れたのは、円覚寺(王家ゆかりの禅寺)から米兵が戦利品として持ち去った15世紀の銅鐘や、鎌倉芳太郎が戦前に収集した紅型(びんがた)染めの型紙約550枚などが含まれていた。⁴³⁾ 彼はまた、ハワイの沖縄系移民に三線(さんしん)などの返還を求めたが、彼の想定に反して、ハワイの多くの人々は、沖縄からの移民の2世や3世の子孫でさえ、これらの品々は自

分たちのコミュニティにとって依然として文化的に重要であると表明した。⁴⁴⁾

山里は1955年から1958年までの数年間しか博物館長を務めなかったが、⁴⁵⁾文化財保護委員会の会長として、ワシントンD.C.のスミソニアン博物館やホノルルのビショップ博物館などの博物館と協力して琉球美術や工芸品の展覧会を開催するなど、こうした活動を続けた。ビショップ博物館は1957年に、スミソニアン博物館は1959年から1960年にかけて展覧会を開催し、後者の展覧会はその後サンフランシスコのデ・ヤング美術館を含む米国数カ所に巡回した。⁴⁶⁾

山里はまた、戦争で大きな被害を受けた多くの史跡や文化財の指定、保護、修復に中心的な役割を果たした。最も有名なのは守礼門で、かつての王宮であった首里城の外門のひとつである。1958年の修復後、守礼門は首里城正殿の復元の1992年まで、沖縄の主要なシンボルのひとつとして宣伝されるようになった。⁴⁷⁾

守礼門復元工事の監督の森政三(1895-1980)や仲座久雄(1904-1962)と一緒に、また1955年に王家の陵の浦添ようどれ、園比屋武御嶽(そのひゃんうたき)の石門などの修復にも取り組んで、また、円鑑池、弁天堂、天女橋も宮殿のすぐ下にあった史跡の復元も実現した。⁴⁸⁾しかし、1950年に戦争で焼失した首里城跡地に創設された琉球大学の敷地内の史跡、また尚家の私有地内の史跡は、修復を目指す交渉や手配が、より複雑な場合も多かった。⁴⁹⁾

日本政府は戦前、このような遺跡の保護に多額の資金と支援を提供していたので、山里はそのような支援を受ける可能性について話し合うために東京に出向いたが、当時沖縄がアメリカ占領下のため、日本政府の権限は琉球には及ばないとの返答を受けた。だが、国からの典型的な方法で財政的な支援を得ることはなかったが、技術的な支援の提供を得ることができた。⁵⁰⁾

戦前の柳宗悦や菊池寛が来沖した際と同様、山里は1958年に川端康成も案内した。⁵¹⁾1960年7月、ラジオ沖縄が放送開始して、最初の放送の一つとして、1930年の戯曲『首里城明け渡し』の特別上演があった。山里自身が演出して、那覇劇場の上演の音声はラジオで琉球全島に放送された。当初は3日間の上演の予定だったが、完全に満席になったため、5日間に延長された。⁵²⁾その前後、文化財保護委員会会長の活動などと同時に、日本、沖縄、そして海外でも戯曲を演出した。例えば1969年に台北の台湾国立劇場での上演もあった。⁵³⁾

1962年、山里は琉球政府の議員選挙に出馬したが、結局約300-400票差で伊良波長幸に敗れた。⁵⁴⁾

その頃、山里は『那覇市史』の編集委員会の委員長にもなり、史料を集めるため日本各地の資料館などへ旅した。⁵⁵⁾それから、こうした史料をもとに、1961年から62年にかけて、『琉球新報』に「壺中天地」を題名として琉球の歴史や文化についての短いコラムを連載し、

1963年に文庫本として刊行した。⁵⁶⁾その後、1971年から72年にかけても同様に、USCAR(琉球列島米国民政府)が発行していた雑誌『守礼の光』に、絵画、書道作品、陶磁器、漆器、織物など、個々の「宝物」である宝物を紹介したりする琉球文化についての短い文章も定期的に掲載した。⁵⁷⁾また、1953年発行の『塵境』を始め小説の出版も続けた。⁵⁸⁾

6. 反逆転運動家としての山里

沖縄が1972年5月に、また日本の県となったいわゆる「復帰」ということは、まるで人気であって、沖縄では圧倒的な支持を得たと紹介されることが多い。しかし、山里を含め、数多くの著名人は琉球が日本に復帰しないよう積極的に主張し、嘆願した。彼らの多くは、占領が延期されたら、完全な独立とまではいなくても、より大きな形の自治が、日本政府の関与なしに、後にアメリカ政府と交渉できるかもしれないと期待していた。⁵⁹⁾

1969年6月、山里は新聞の『沖縄時報』に「日本は祖国に非ず」と題するオピニオンを発表した。『沖縄時報』はその直後、それを山里の他の2つの新聞オピニオンのエッセイとともに、『沖縄人の沖縄』というタイトルで単行本としても再出版した。⁶⁰⁾台湾の『チャイナ・ポスト』紙のジョー・ハン(Joe Hung)も、『Japan is Not Our Fatherland』を台として英訳を同紙に5回に分けて掲載し、パンフレットとしても出版した。⁶¹⁾これらのエッセイの中で山里は、特に琉球王国の歴史的な主権独立、1870年代まで琉球では誰も「日本人」と認識しなかった事実、そして沖縄の歴史、文化、アイデンティティを恥じ、自分たちを日本人と考えるよう沖縄県民に教えた植民地主義的な日本の教育などに焦点を当て、沖縄の歴史を概観している。

同年、1969年10月、山里は琉球政府元首席の當間重剛(とうま・じゅうこう)ら数人とともに「沖縄人の沖縄をつくる会」を設立し、副会長に就任された。⁶²⁾當間は会長にして、メンバーは42人になった。⁶³⁾当時の他の復帰反対グループと同様に、琉球の日本経済への再入による経済的ショックが和らぐまで復帰を延期し、琉球人に自らの将来を決定する力を与える住民投票を実施することを提唱した。⁶⁴⁾彼らはまた、山里が『日本は祖国に非ず』などのエッセイに強調したように、琉球の人々の独立した歴史と民族的アイデンティティ、そして日本ではなく沖縄が彼らの「祖国」であることを強調した。⁶⁵⁾

その翌年、山里をはじめとするこの会のメンバー数人が「琉球独立党」を結成し、「沖縄人の沖縄をつくる会」を吸収合併した。⁶⁶⁾「琉球独立党」は、1971年の国会議員選挙で3000票にも満たなかったため、順次姿を消していった。⁶⁷⁾

7. 復帰後と晩年

沖縄芸能連盟会、沖縄文化連盟会、琉球文化連盟

会も1970-80年代に数年間会長としていたことを含めて、山里は晩年に至っても、沖縄文化界にまた活発に活動していた。⁶⁸⁾ 1970年に琉球新報賞を受賞、1978年には沖縄県功労者に選ばれた。⁶⁹⁾ 琉球の歴史観や文化観に照らして批判的に日本の沖縄支配や復帰、またはそれに関連する政治のテーマについての執筆活動を続けていたが、政治団体の参加や政治的な活動をどの程度まで正式に続けていたのかはあまり明らかではない。1989年5月5日、86歳でこの世を去った。⁷⁰⁾

[注釈]

- 1) 金城、高良 [1984].
- 2) 山里 [1980].
- 3) 川平 [1989].
- 4) 山里 [1980].
- 5) 現在の東京藝術大学の前身である東京美術学校と混同しないように。
- 6) 山里 [1980].
- 7) マヴォ. 第1号. 1924, 表紙。
- 8) 「学芸だより」.; Weisenfeld [2002]. p93.; 山里 [1980]. pp82-83; 五十殿利治等編 [2006]. pp 411-418, 452-453, 480-484, 486-492, 579. 「三科」とは、政府公認の帝展の保守性と排他性に対抗して結成された二科を補うため、あるいはそれに取って代わるために作られたグループであった。Weisenfeld [2002]. p98.
- 9) 新城 [2003]. p44.; 山里 [1980]. p83.
- 10) 山里 [1980]. p82.
- 11) 川平 [1989].
- 12) 偶然にも、この警官の息子である山本恵元一 (1913-1977) は、戦後沖縄におけるシュルレアリスム芸術の先駆者として注目されるようになった。山里 [1980]. p83.; 豊見山 [2016].
- 13) 山里 [1980]. pp84, 87.
- 14) 山里 [1980]. p85.
- 15) 山里 [1980]. pp85-86.
- 16) 山里 [1980]. p86.
- 17) 山里 [1980]. p85.
- 18) 新城 [2003]. p44.
- 19) 仲程 [2015]. p31.
- 20) 山里 [1980]. p86.; 『那覇四町昔気質』、『沖縄大百科事典』下巻 [1983]. p75.
- 21) Roberson [2010]; 阿波根 [1992]. p2.
- 22) この名言はまた、尚寧王 (在位 1587-1620 年) にも関連付けられることがある。尚寧王は同様に、1609年に沖縄に侵攻した島津家の武士軍に平和的に降伏し、沖縄とその民衆のさらなる流血を免れたと言われている。Smits [2010].
- 23) この言葉が最初に登場したのは、組踊の「屋慶名大主敵討ち」であったと考えられている。新城 [2003]. p44.
- 24) 仲程 [2015]. pp31-32.
- 25) 山里 [1980]. p87.
- 26) 山里 [1980]. p87.
- 27) 山里 [1933].
- 28) 仲程 [1990]. pp189-191.
- 29) 山里 [1980]. p88.
- 30) 山里 [1980]. p91; 船越 [1989].
- 31) 山里 [1969c]. pp181-182.
- 32) 尚順 [1969].
- 33) 例: 比嘉 [1937]; 東恩納 [1938]; 柳 [1939]; 山里・金城 [1938]; 河井・浜田 [1939]; 伊波 [1939].
- 34) 山里 [1980]. p89.
- 35) 山里 [1980]. pp89-90.; Clarke [2002].
- 36) 山里 [1980]. p90.
- 37) ゑりまんは現在も営業しているが、旧木崎洋服店の所在地は現在、ザ・ターミナル京都として営業している。
- 38) 山里 [1980]. pp94-95.
- 39) 山里 [1980]. p95.
- 40) 山里 [1980]. p96.
- 41) 琉球政府 (Government of the Ryukyu Islands; GRI) は、1952年に沖縄民政府 (1946-1952) の行政再編の一環として設立された。琉球政府は、USCAR (琉球列島米国民政府) の権限の下、民主的に選出された沖縄の民間人指導者で構成される民間政府であった。首里当蔵町にあった博物館は、1945年から46年にかけて首里と東恩納村に別々に設立された博物館が合併してできたものであって、1953年から1955年まで沖縄民政府立博物館として一時的に呼ばれた。與那嶺 [2003]. p71.
- 42) 仲泊 [1971].
- 43) 山里 [1980]. pp97, 101.
- 44) 山里 [1980]. p103.
- 45) 「山里永吉氏死去 戦後、文化たて直しに貢献」、沖縄タイムス、1989年5月6日。
- 46) 「優れた知識の宝庫-スミソニアン研究博物館」『守礼の光』。1959年6月号. pp12-13.
- 47) Figal [2006]. pp108-109.
- 48) 山里 [1980]. p104.; 琉球政府文化財保護委員会 [1959]. pp4-5.; 那覇市教育委員会文化課 [1986]. p49.
- 49) 山里 [1980]. pp104-105.
- 50) 山里 [1980]. p98.
- 51) 山里 [1980]. p88.
- 52) 「首里城明け渡し: 大伸座の舞台より」、『オキナワグラフ』, 1960年8月号. 転載: 『オキナワグラフ特別号: 首里城再録: 読み返す 60 年』, 2020 年 1 月, pp2-3.
- 53) 山里 [1980]. p107.
- 54) 山里 [1980]. pp106-107.
- 55) 山里 [1980]. p107.
- 56) 山里 [1963].
- 57) 『守礼の光』 1971 年 1、2、3、4、7、8、9、10、12 月号、1972 年 3、4 月号。
- 58) 山里 [1953].
- 59) 山里 [1980]. p108.
- 60) 山里 [1969a].
- 61) Yamazato [1969b].
- 62) 沖縄人の沖縄をつくる会 [1969]; Tōma [1969].
- 63) 瀬永 [1970]. p235.
- 64) Sakima [1971].

- 65) Murray [1971].
 66) 成田 [2024]. p210; 「沖縄人の沖縄をつくる会」,
 『沖縄百科事典』上巻 [1983]. p538.
 67) 後田多 [2015].
 68) 「沖縄芸能連盟」, 『沖縄大百科事典』上巻
 [1983]. p452.; 「琉球文化連盟」, 『沖縄大百科
 事典』下巻 [1983] p920.
 69) 「山里永吉氏死去」. 琉球新報, 1989 年 5 月 6
 日.
 70) 「山里永吉氏死去 戦後、文化たて直しに貢献」
 沖縄タイムス, 1989 年 5 月 6 日.

[参考文献]

- 阿波根昌鴻. 『命こそ宝—沖縄反戦の心』. 岩波新書、
 1992.
 Association to Build Okinawa for the Okinawans,
 The 沖縄人のための沖縄をつくる会.
 “Declaration adopted by the Formation
 Convention, the Association to Build
 Okinawa for the Okinawans, 11 October
 1969, at Okiei Theatre.” 1969 年 10 月 11 日.
 沖縄県公文書館, エドワード・フライマス
 (Edward Freimuth) 文書. 書架コード 06-A-
 13-04, 資料コード 0000024749.
 Clarke, Hugh. “The great dialect debate: The state
 and language policy in Okinawa.” in Elise K.
 Tipton, ed., *Society and the state in interwar
 Japan*. Routledge, 2002, pp193-217.
 Figal, Gerald. “The Battle of Tropical Ryukyu
 Kingdom Tourist Okinawa.” in *History and
 Folklore Studies in Japan*, eds. David
 Howell and James Baxter. International
 Research Center for Japanese Studies, 2006,
 pp105-123.
 船越義彰. 「追悼 那覇人に徹した山里氏」. 沖縄タイ
 ムス, 1989 年 5 月 8 日.
 「学芸だより」, 朝日新聞. 1924 年 5 月 28 日, p8.
 東恩納寛惇. 「崇元寺下馬碑について」. 『月刊琉球』
 第 2 巻第 5 号. 1938 年 3 月.
 比嘉春潮. 「文壇人の印象」. 『月刊琉球』第 1 巻第 3
 号. 1937 年 7 月.
 伊波普猷. 「ころ考」. 『月刊琉球』第 3 巻 6 月号.
 1939 年 6 月.
 川平朝申. 「山里永吉氏の逝去を悼む」. 琉球新報,
 1989 年 5 月 8 日.
 河井寛次郎, 浜田庄司. 「琉球問答」. 『月刊琉球』第
 3 巻 6 月号. 1939 年 6 月.
 金城正篤, 高良倉吉. 『「沖縄学」の父・伊波普猷』. 清
 水書院, 1984.
 マヴォ. 第 1 号. 1924.
 Murray, Geoffrey. “Okinawan Group Opposes
 Reversion.” *Japan Times*, 1971 年 1 月 20 日.
 沖縄県公文書館, エドワード・フライマス
 (Edward Freimuth) 文書. 書架コード 06-A-
 13-04, 資料コード 0000024749.
 那覇市教育委員会文化課, eds. 『重要文化財 園比屋
 武御嶽石門保存修理工事報告書』. 那覇市教育
 委員会, 1986.
 仲程昌徳. 『琉書探求』. 新泉社, 1990.
 仲程昌徳. 「首里城明渡し 私感」. 『環』第 60 号.
 2015, pp31-33.
 仲泊良夫, 「山里永吉と沖縄文化」, 琉球新報 1971 年
 11 月 19 日.
 成田千尋. 『世界史のなかの沖縄返還』. 吉川弘文館,
 2024.
 『沖縄大百科事典』上・中・下巻. 沖縄タイムス社,
 1983.
 五十殿利治 等(編). 『大正期新興美術資料集成』.
 国書刊行会, 2006.
 Roberson, James E. “Songs of War and Peace:
 Music and Memory in Okinawa,” *The Asia-
 Pacific Journal*, 31-3-10, August 2, 2010.
 琉球政府文化財保護委員会(編). 『首里城守礼門復
 原工事報告書』. 守礼門復原期成会, 1959.
 Sakima Binshō 崎間敏勝. “Ryukyu Independence
 Party.” 1971 年 5 月 26 日. 沖縄県公文書館,
 エドワード・フライマス(Edward Freimuth)文書.
 書架コード 06-A-13-04, 資料コード
 0000024749.
 瀬永亀次郎. 『沖縄人民党—闘いの 25 年』. 新日本出
 版社, 1970.
 後田多敦. 「沖縄は平和と共存のアジアをめざす」.
 『現代の理論』第 6 号, 2015 年.
[https://gendainoriron.jp/vol.06/feature/f02.p
 hp](https://gendainoriron.jp/vol.06/feature/f02.php).
 新城栄徳. 「沖縄主義者・山里永吉」. 『ウルマネシア』
 第 5 号, 2003, pp43-45.
 尚順. 「首里城明け渡しへの思い出」. 『月刊琉球』第 1
 巻 5 号. 1937 年 9 月, pp3-4. 転載: 『松山王
 子尚順遺稿』. 山里永吉(編). 第一法規出版,
 1969. pp3-6.
 『守礼の光』, 1971 年 1, 2, 3, 4, 7, 8, 9, 10, 12 月号,
 1972 年 3, 4 月号.
 「首里城明け渡し: 大伸座の舞台より」, 『オキナワグラ
 フ』, 1960 年 8 月号. 転載: 『オキナワグラフ特別
 号: 首里城再録: 読み返す 60 年』, 2020 年 1 月.
 Smits, Gregory. “Examining the Myth of
 Ryukyuan Pacifism,” *The Asia-Pacific
 Journal*, 37-3-10, September 13, 2010.
 「優れた知識の宝庫—スミソニアン研究博物館」,
 『守礼の光』. 1959 年 6 月号. pp12-13.
 Tōma Jūgō 當間重剛. “The Association to Build
 Okinawa for the Okinawans.” (Lt. Gen.
 James B. Lampert, High Commissioner of
 the Ryukyu Islands 宛の手紙). 1969 年 10 月
 12 日. 沖縄県公文書館, エドワード・フライマス
 (Edward Freimuth) 文書. 書架コード 06-A-
 13-04, 資料コード 0000024749.
 豊見山愛. 「シュルレアリスムと山元恵一: 「夢」の彼方
 に」. 『沖縄県立博物館・美術館美術館紀要』
 第 6 号. 2016, pp114-126.
 Weisenfeld, Gennifer, *Mavo: Japanese Artists and
 the Avant-Garde, 1905-1931*. University of

California Press, 2002.

山里永吉.『山里永吉集』. 新星堂書房, 1933.

山里永吉.『塵境』. 琉球新報社, 1953.

山里永吉.『壺中天地』. 光有社, 1963.

山里永吉.『沖縄人の沖縄—日本は祖国に非ず』. 沖縄時報社, 1969a. 那覇市歴史博物館蔵. 資料コード 10007863.

Yamazato, Eikichi, Joe Hung (訳), *Japan is Not Our Fatherland*, 1969b. 沖縄県立公文書蔵. エドワード・フライマス(Edward Freimuth) 文書資料コード 0000024749.

山里永吉.「尚順男爵と私」.『松山王子尚順遺稿』. 山里永吉(編). 第一法規出版, 1969c, pp180-203.

山里永吉.「私の戦後史—山里永吉」.『私の戦後史』第2集. 沖縄タイムス社, 1980, pp75-109.

山里永吉, 金城安太郎.「賢君」.『月刊琉球』第2巻第8号. 1938年9月.

「山里永吉氏死去」. 琉球新報, 1989年5月6日.

「山里永吉氏死去 戦後、文化たて直しに貢献」. 沖縄タイムス, 1989年5月6日.

柳宗悦.「菟集に就て」.『月刊琉球』第3巻6月号. 1939年6月.

與那嶺一子.「沖縄民政府立博物館の模造作品からみる戦後紅型の復興」.『沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要』第17号, 2024, pp71-80.